

総合学科における「家庭基礎」のあり方

—本校の特色を生かした年間指導計画の立案—

家庭科 小清水 貴子・良 香織

1年次必修科目「家庭基礎」について、学習に対する生徒の期待を明らかにし、本校の特色を生かした年間指導計画を立案するため、アンケート調査の分析と検討を行った。その結果、生徒の約7割が現在の生活に役立つ、約9割が将来の生活に役立つ科目として家庭科をとらえていることがわかった。学習項目としては「調理実習」と「消費生活」に対して学習期待が高く、ライフスタイルを自分で選択することをテーマにした年間指導計画を立案した。

キーワード：高等学校 総合学科 家庭科 家庭基礎

1. 研究の目的

平成11年3月の学習指導要領の改訂に伴い、必修家庭科は、「家庭基礎(2単位)」「家庭総合(4単位)」「生活技術(4単位)」の3科目から1科目を選択して履修することになった。これまでの「家庭一般」「生活技術」「生活一般」ではすべて4単位であったが、今回の改訂では家庭科の単位数を減らすことも可能になる。改訂の趣旨として、学習指導要領解説に「…すべての生徒が共通に学習する必修教科・科目の最低単位数を縮減し、学校や生徒の選択の幅を広げ、選択科目や各学校が独自に設ける学校設定教科・科目の履修を通して、生徒の興味・関心、進路希望等に応じ、より深く高度に学んだり、より幅広く学んだりする仕組みを整え、それぞれの能力を十分伸ばすことのできる教育の展開を目指している。」¹⁾と記されている。つまり、生徒の興味・関心や進路を軸として、科目は各学校の状況に応じたものを選択し、学習内容の幅を広げたものと解釈できる。

その中で新たな科目として設けられた「家庭基礎」は、標準単位数を2単位とし、「人の一生と家族・福祉、衣食住、消費生活などに関する基礎的・基本的な知識と技術を習得させ、家庭生活の充実向上を図る能力と実践的な態度を育てる」ことが科目の目標である。内容は、(1)人の一生と家族・福祉、(2)家族の生活と健康、(3)消費生活と環境、(4)ホームプロジェクトと学校家庭クラブ活動の4項目で構成されている。学習指導要領の改善の具体的事項として「(ウ)「家庭基礎」は、少子高齢化社会における課題を踏まえ、生活に必要な基礎的・基本的な知識と技術の習得に重点を置き、人の一生と家族、福祉、家族の生活と健康、消費生活と環境などの内容で構成する」²⁾と記述されている。つまり「家庭基礎」では、内容を基礎的・基本的なものにとど

めるとともに、人の一生を軸として学習を展開し、生徒自身が自分の問題として学習を進めることが求められているといえよう。

この新教育課程は平成15年度から年次進行により段階的に実施されているが、本校では平成14年度に「家庭一般(4単位)」から「家庭基礎(2単位)」に移行し、1年次で履修することにした。

本校は1学年4クラスで編成されている。1年次は必修科目を履修し、2年次以降は一人ひとりの興味・関心や進路に応じて、4つの系列「生物資源・環境科学系列(以下、生物・環境系列と記す)」「工学システム・情報科学系列(以下、工学・情報系列と記す)」「生活・人間科学系列(以下、生活・人間系列と記す)」「人文社会・コミュニケーション系列(以下「人文・社会系列」と記す)」にある科目を選択履修する。

家庭科の専門教科は「生活・人間科学系列」に置かれており、この系列にある「クッキングモデル」「アパレルモデル」「福祉モデル」を履修する生徒にとって、1年次で学ぶ必修家庭科は専門教科の土台となる科目になる。しかし他系列の科目を履修する生徒にとっては、必修家庭科は、生涯で最後の家庭科の授業になるといえる。

また、本校は調理室・被服室ともに設備が整っている。本来、「家庭基礎」の学習項目には被服実習は取り上げられていないが、本校ではミシンが一人一台使え、1クラス40人の実習が可能であること、また専門教科の基盤となる授業であるという認識から、「家庭基礎」で被服実習を取り入れている。

「家庭基礎」実施の初年度にあたる平成14年度は、二期制をとっていたため、2人の教員が担当し、2クラスごとに同じ時間に授業を設定した。表1に示すように、学習項目を「食物・高齢者・保育」「被服・家族・消費

者」のように大きく2つの領域に分けて、前期・後期でクラスを入れ替えて授業を行った。

〔表1〕

| 平成14年度 年間指導計画表 | | | | |
|----------------|-----------------|---|---|-----------------|
| 教科 | 家庭 | 科目 | 家庭基礎 | 2 |
| 指導年次 | 必修 1年 | 教科書 | 家庭基礎 (実教出版株式会社) | |
| 担当者 | 土屋 光 ・ 島崎則子 | 副教材 | 2001新食品成分表 FOODS (出版社 一橋出版) | |
| 学期 | 単元名または題目 | 指導内容 | 指導上の留意点、資料等 | 予定時数 |
| 前 | 衣生活をつくる 被服製作 | I. 基礎縫い ①ボタン付け → 提出 ②ミシンの使い方、練習 II. エプロン制作 ①裁断②縫いしろのしまつ (胸元かがりい) ③ポケット口の三つ折り縫い ④ポケット布に刺しゅう (なまえ・模様) 三角巾になまえを刺しゅう ⑤ポケットを縫いつける ⑥周囲のしまつ ⑦テープとDかんをつける ⑧まとめ・仕上げ → 提出 | 四つ穴ボタンをつけることができるようにする 作品・製作記録簿提出 | 1 2 9 |
| | 家族とかがわって 生きる | 1. 家族って何だろう 2. 家族と法律 3. パートナーと出会う 4. 生活を支える仕事と生活時間 | 家族構成員がそれぞれ協力し、家庭を築くことの重要性を認識させる 作文「わたしの家族」 作文「わたしの結婚観」 VTR視聴・感想文 | 6 |
| | 消費行動を考える | 1. 主体的な消費行動 2. 消費者の権利と責任 3. 資源・環境を考える | VTR視聴・感想文 | 4 |
| | 経済的に自立する | 1. 経済のしくみを知る 2. 計画的にお金を使う | | 3 |
| | | | | 25 |
| 後 | 食生活をつくる | 1. 栄養と食品のかかわり 2. 食生活を見つめる (現状と問題点) 3. 栄養所要量と食品群別摂取量のめやす 4. 食品の調理性・調理の基本 5. 食品の衛生と安全 調理実習1「親子どんぶり・わかめの酢の物」 調理実習2「鮭のムニエル・コンソメスープ」 | ・基本的知識を習得させる。 ・その知識を実生活に応用できる力を養う。 | 14 |
| | 高齢者と関わって 生きる | 1. 高齢社会の現状 2. 高齢期の心とからだ | VTR視聴・感想文 | 3 |
| | 社会と関わって 生きる | 1. 社会福祉とボランティア | VTR視聴・感想文 | 2 |
| | 子どもと関わって 生きる | 1. 成長と発達 2. 精神発達 | VTR視聴・感想文 | 6 |
| | | | | 25 |
| 筑波大学附属坂戸高校 | | | 年間時数 | 50 |

2年目の平成15年度は、三学期制に伴い、年度中に学習項目別にクラスを入れ替えて授業を行うことはせず、教員1人が通年を通して担当することにした(表2)。教員

は3人で担当した。しかし、2クラスの授業時間帯が重なっていたため、調理実習や被服実習の設備の都合上、学習項目の順番を入れ替えて授業を行うことになった。

〔表2〕

| 平成15年度 年間学習指導計画 | | | | | |
|-----------------|---|--|--|--|-------------|
| 教科 | 家庭 | 科目 | 家庭基礎 | 単位数 | 2 |
| 指導年次 | 必修 選択 | 1年 | 教材 | 家庭基礎 | (出版社: 実教出版) |
| 担当者 | 小清水貴子・中村慶子・長香織 | | 副教材 | 2001新食品成分表FOODS (出版社: 一橋出版) | |
| 学期 | 単元名または題目 | 指導内容 | 指導上の留意点、資料等 | 予定時数 | |
| 1 学 期 | 1. 自分らしく生きる | 1. 自分をみつめる 2. 発達段階と生活設計 | 青年期の課題を認識させ、実際に生活設計をたてさせる。 | 2 | |
| | 2. 人とかかわって生きる (1)家族とかかわって生きる | 1. 家族って何だろう 2. 家族と法律 3. 労働と生活時間 | 家族構成員が協力して、家庭を築くことの重要性を認識させる。 | 4 | |
| | (2)子どもとかかわって生きる | 1. 生命の誕生 2. 心身のゆたかな発達を 3. 子どもの生活を知る 4. 児童福祉 | 乳幼児の心身の発達や親の役割、福祉について理解させ、子どもを産み育てることの意義を考えさせる。VTR視聴 | 6 | |
| | (3)高齢者とかかわって生きる | 1. 高齢社会の現状と課題 2. 高齢者の身体と心 3. 福祉システム | 高齢者の心身の特徴と生活、高齢者福祉について理解させ、家庭や地域、社会の果たす役割が重要であることを認識させる。 | 2 | |
| | (4)社会とかかわって生きる | 1. 社会保障制度 2. 地域福祉 | | 2 | |
| | 3. 生活をつくる (1)衣生活をつくる | 1. 私たちの衣生活 2. 衣服素材の種類と性能 3. 衣服の購入と手入れ 4. 衣生活の環境と資源 | 三原組織の作成 | 2 | |
| | | | | 18 | |
| 2 学 期 | 4. 消費者として自立する (1)消費行動を考える (2)経済的に自立する | 【被服実習】 1. 基礎縫い ①ボタンつけ⇒提出 ②ミシンの使い方、練習 2. エプロン製作 ①裁断 ②縫い代の始末 ③ポケット口の三つ折縫い ④ポケット布に刺繍 ⑤ポケットつけ ⑥周囲の始末 ⑦テープ・Dかん ⑧仕上げ | ◇被服実習 四つ穴ボタンをつけることができるようにする | 1 2 7 | |
| | | 1. 主体的な消費行動 2. 消費者の権利と責任 3. 経済のしくみを知る 4. 人生設計と経済設計 | 庭経済や消費生活に関する基礎的な知識を習得させるとともに、消費者として責任をもって行動できるようにさせる。 | 2 2 | |
| | | 1. 人と住まいのかかわり 2. 生活空間の計画 3. 健康と安全に配慮した室内環境 4. 住環境と地域環境 | 平面図の読み取り・平面計画の立案・ワークシート・VTR視聴 | 6 | |
| | | | | 20 | |
| | 3 学 期 | (2)食生活をつくる | 1. 栄養と食品のかかわり 2. 食品の選び方と安全 3. 栄養所要量と食品摂取のめやす 4. 食生活の現状と課題 【調理実習1】 親子どんぶり・すまし汁・わかめとしらすの酢の物 【調理実習2】 ビーフストロガノフ・フレンチサラダ | 衣・食・住生活に必要な基本的知識と技術を習得させ、家族の生活を健康で安全かつ快適に営むことができるようにする。 実習・ワークシート | 20 |
| | | | 20 | | |
| | | | | 年間時数 | 60 |

しかし、従来4単位で行っていた授業を2単位にするということは、学習内容を半減させなければならない。学習指導要領には、基礎的・基本的なものを中心にと記されているが、実際の授業では、学習内容をなかなかそぎ落とすことができない。その理由として、「家庭基礎」は、先述したとおり、ある生徒にとっては専門教科の土台となる科目であり、また他の生徒にとっては一生涯で最後に学ぶ家庭科の科目であり、あれもこれも学ばせたいという気持ちを拭えない。だが一方で、どんなに教える側が意気込んで授業に臨んでも、授業時間数が少ないため、結果として、どの学習項目も駆け足でこなすことになり、学習内容がどれだけ生徒の身についたのかは疑問である。教える側としても、年間指導計画の内容をこなすのに精一杯で、じっくりと一つテーマを掘り下げていくことができないジレンマを感じずにはいられず、生徒にとっても教員にとっても消化不良の感が否めない。したがって、生徒に家庭科の楽しさを感じさせ、生涯で最後になるかもしれない家庭科の授業を、もっと生徒の心に残るものにしたいと考える。

そこで本研究では、生徒が「家庭基礎」に何を求めているのか、生徒の家庭科の学習に対する期待を明らかにし、「家庭基礎」の学習内容を検討する。また、本校の特色として、本来「家庭基礎」では扱われていない被服実習をどのように扱っていけばよいか検討することを目的とする。

2. 研究方法

生徒が「家庭基礎」に何を求めているのか、生徒の家庭科の学習に対する期待を探るため、平成15年度入学の1年次全員にアンケート調査を実施した。実施時期は「家庭基礎」履修後の平成16年3月で、調査項目はつぎのとおりである。

- 1) 「家庭基礎」の授業を楽しく受けることができたか。
- 2) 授業項目(自分とは何か・家族・保育・高齢者・栄養と食品・調理実習・被服材料・被服実習・住居・消費経済・資源と環境)について、①学んでよかったと思う項目、②あまり必要ではないと思う項目、③もっと学びたいと思う項目、④高校生に役立つと思う項目、⑤将来、役に立つと思う項目を、それぞれ3項目ずつ選択する。
- 3) 「家庭基礎」の授業について、①自分の今の生活に役立つと思うか、②将来の生活に役立つと思うか、③被服実習のエプロン教材はよかったか、④調理実習の献立はよかったか、⑤授業時間数はよかったか、それぞれ選択肢から選んで回答し、⑥その他、要望や感想など自由

記述で回答する。

アンケート調査は男女別・系列別でクロス集計を行った。その結果をもとに、生徒の「家庭基礎」に対する学習期待を探り、「家庭基礎」の学習内容について検討を行った。

3. 研究結果および考察

平成16年3月上旬に1年次生4クラス計158名(男子64名・女子94名)を対象にアンケートを実施した。有効回答数は146名(男子57名・女子89名)で、回収率は92.4%であった。調査対象者の内訳については、表3に示したとおりである。

以下、アンケート項目にそって、男女別・系列別に結果をみていく。

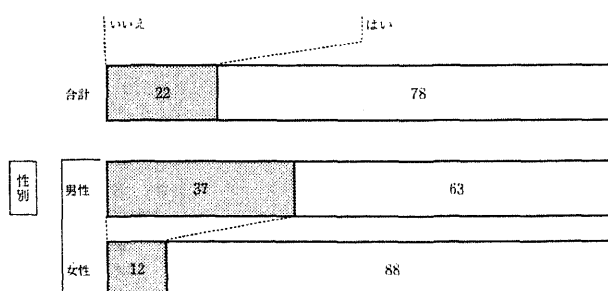
〔表3〕 調査対象者

| 系 列 | 男子 | 女子 | 合 計 |
|----------------|----|----|-----|
| 生物・資源環境科学 | 18 | 17 | 35 |
| 工学システム・情報科学 | 26 | 5 | 31 |
| 生活・人間科学 | 7 | 57 | 64 |
| 人文社会・コミュニケーション | 6 | 10 | 16 |
| 合 計 | 57 | 89 | 146 |

1) 「家庭基礎」の授業を楽しく受けることができたか

表4に示すように、全体では114名(78%)の生徒が「楽しく受けることができた」と答えた。男女の内訳をみると、「楽しく授業を受けることができた」と答えたのは、男子36名(63%)、女子78名(88%)で、女子の方が多かった。また系列別でみると、人文・社会系列(100%)、生活・人間系列(81%)、生物・環境系列(71%)、工学・情報系列(67%)の順に、楽しんで授業を受けた生徒が多かった。

〔表4〕「家庭基礎」の授業を楽しく受けることができたか



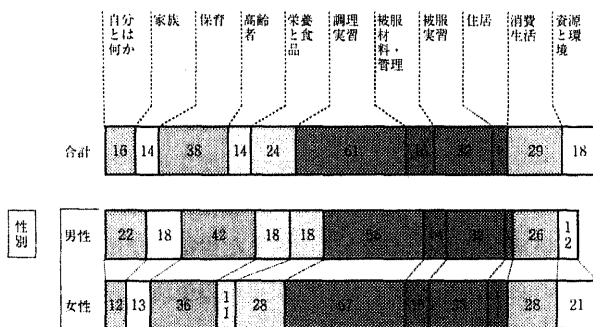
2) 授業項目について

①学んでよかったと思う項目

生徒が学んでよかったと答えた上位5項目(表5)は、「調理実習(41%)」「保育(26%)」「被服実習(22%)」「消費生活(20%)」「栄養と食品(16%)」であった。男子で第5位に「自分とは何か」の項目が入った以外は、とくに男女の差は見られなかった。男女ともに「調理実習」「被服実習」の項目について学習の満足度が高いといえる。

系列で見ると、「調理実習」はどの系列でも第1位に上がり、第2位と第3位の項目は、生物・環境系列では「資源と環境」「消費生活」、工学・情報系列では「保育」「消費生活」、生活・人間系列では「保育」「被服実習」、人文・社会系列では「自分とは何か」・「被服実習」の順であった。生物・環境系列では第4位に「栄養と食品」が上がり、「被服実習」よりも環境や食についての関心が高いことがうかがえた。

〔表5〕学んでよかったと思う項目

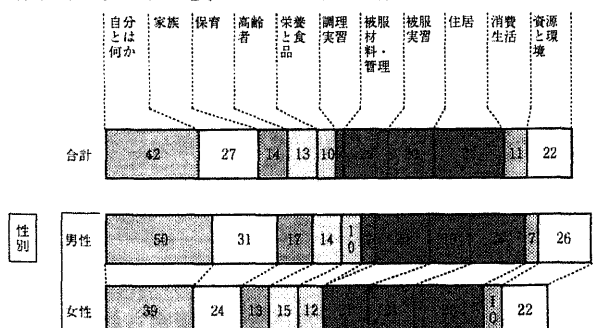


②あまり必要ではないと思う項目

生徒があまり必要ではないと思う項目(表6)をあげると、「自分とは何か(35%)」「住居(27%)」「家族(23%)」「被服材料・環境と資源(18%)」であった。ここでは、とくに男女差は認められなかった。

系列では、生物・環境系列、生活・人間系列では全体と同じ傾向がみられた。工学・情報系列では「自分とは何か」「被服材料」「被服実習」の3つが同位

〔表6〕あまり必要でないと思う項目



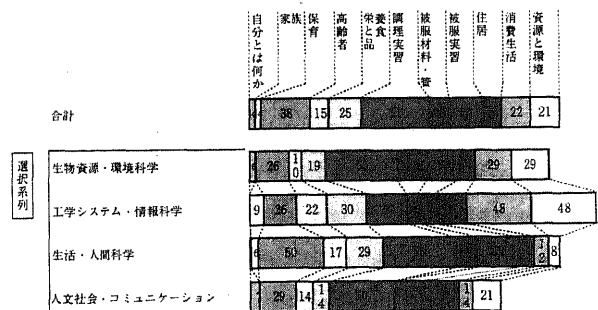
であり必要ではないという学習項目にあがっていた。人文・社会系列では「資源と環境」「被服実習」が上位であり、資源や環境に関する学習の必要性が認められていなかった。

③もっと学びたいと思う項目

全体で、もっと学びたいと思う項目(表7)は「調理実習(38%)」「保育(28%)」「被服実習(19%)」「栄養と食品(18%)」「消費生活(16%)」であった。男女別では、男子は「調理実習(98%)」「保育(77%)」「栄養と食品(54%)」、女子では「調理実習(58%)」「保育(38%)」「消費生活(30%)」であり、とくに男子の「調理実習」への学習期待度が高いことがわかった。また「保育」も男女ともに関心が高いといえる。

系列では、工学・情報系列で「資源と環境・消費生活」が第1位であったが、他の系列はすべて「調理実習」がもっと学びたい学習項目の第1位であった。第2位以下をみると、生物・資源系列は「資源と環境・消費生活」「保育」、工学・情報系列では「調理実習・栄養と食品」「保育」、生活・人間系列では「保育」「被服実習」、人文・社会系列では「保育」・「住居」「被服実習」・「資源と環境」の順であった。ここでも系列の特徴がよくあらわれているといえる。

〔表7〕もっと学びたい項目



④高校生に役立つと思う項目

表8に示すように、全体では「調理実習(33%)」「自分とは何か(28%)」「消費生活(23%)」「栄養と食品(16%)」「被服実習(15%)」であった。「自分とは何か」の学習項目はあまり必要ではないと思う項目の上位にあがっていたが、役立つと認識されているというおもしろい結果になっている。「自分とは何か」という学習項目は、生活には直接的に結びつかないが、自分の生き方・進路を考える上では、高校生のいまの時期に役立つということだと解釈される。また「必要」と「役立つ」という言葉のニュアンスの違いが、回答する生徒たちにどう受け取られたのか、質問項目の設定について再検討が必要であるといえる。

ここでは男女の違いはとくにみられなかった。系列別にみると、生物・環境系列では「調理実習」「自分とは何か」「消費生活」「被服実習」、工学・情報系列では「自分とは何か」「調理実習」「栄養と食品」「消費生活」、生活・人間系列では「調理実習」「自分とは何か」「消費生活」、人文・社会系列では「自分とは何か」「調理実習」「保育」の順に多かった。

〔表8〕高校生に役立つと思う項目

| | 自分とは何か | 家族 | 保育 | 高齢者 | 栄養と食品 | 調理実習 | 被服材料・管理 | 被服実習 | 住居 | 消費生活 | 資源と環境 |
|----------------|--------|----|----|-----|-------|------|---------|------|----|------|-------|
| 合計 | 39 | 17 | 16 | 15 | 23 | 47 | 17 | 17 | 32 | 18 | |
| 選択系列 | | | | | | | | | | | |
| 生物資源・環境科学 | 30 | 33 | 15 | 9 | 15 | 55 | 17 | 17 | 30 | 9 | |
| 工学システム・情報科学 | 45 | 7 | 7 | 34 | 1 | 1 | 1 | 1 | 34 | 21 | |
| 生活・人間科学 | 39 | 13 | 16 | 25 | 25 | 1 | 1 | 1 | 33 | 23 | |
| 人文社会・コミュニケーション | 50 | 21 | 29 | 7 | 43 | 1 | 1 | 1 | 21 | | |

⑤将来、役に立つと思う項目

全体として、将来、役立つと思う項目（表9）をみると、「調理実習（34%）」「消費生活（31%）」「保育（28%）」「高齢者」「栄養と食品（16%）」「住居（14%）」の順であった。

「高齢者」の学習項目は、これまでの問いには取り上げられていなかったが、将来にとって学習の必要性を感じているといえる。また「住居」についても同様に、いま現在の生活には学習は必要ないと感じているが、将来的には学びたい項目としてとらえられていた。

男女の内訳をみると、男子では「調理実習（84%）」「消費生活（81%）」「保育（60%）」「高齢者（46%）」「住居（42%）」の順に、女子では「調理実習（58%）」「消費生活（54%）」「保育（49%）」「栄養と食品（29%）」「高齢者（26%）」の順に多かった。「高齢者」「住居」については女子よりも男子の方が将来役立つと考えていることがわかった。

〔表9〕将来、役に立つと思う項目

| | 自分とは何か | 家族 | 保育 | 高齢者 | 栄養と食品 | 調理実習 | 被服材料・管理 | 被服実習 | 住居 | 消費生活 | 資源と環境 |
|----------------|--------|----|----|-----|-------|------|---------|------|----|------|-------|
| 合計 | 16 | 41 | 23 | 23 | 16 | 46 | 17 | 17 | 46 | 12 | |
| 選択系列 | | | | | | | | | | | |
| 生物資源・環境科学 | 1 | 46 | 4 | 26 | 1 | 49 | 17 | 17 | 49 | 17 | |
| 工学システム・情報科学 | 13 | 37 | 30 | 13 | 1 | 47 | 17 | 17 | 47 | 20 | |
| 生活・人間科学 | 1 | 45 | 26 | 26 | 1 | 45 | 17 | 17 | 45 | 17 | |
| 人文社会・コミュニケーション | 1 | 35 | 29 | 18 | 24 | 43 | 17 | 17 | 43 | 17 | |

系列ごとの特徴をみると、生物・環境系列では「調理実習」「消費生活」「保育」、人文・社会系列では「調理実習」「消費生活」「住居」「家族」がそれぞれ上位であった。「家族」の学習項目はあまり必要ではない項目にあがっていたが、人文・社会系列では将来に役立つ項目として考えている生徒がいることがわかった。

3) 「家庭基礎」の授業について

①自分の今の生活に役立つと思うか

「今の生活に役立つ」と答えた生徒は全体で113名（75%）、男子は36名（64%）、女子は75名（81%）であった（表10）。系列では、生活・人間系列（89%）人文・社会系列（88%）生物・環境系列（61%）工学・情報系列（59%）の順であった。ほぼ3分の2以上の生徒が、「家庭基礎」の授業を、いまの自分の生活に役立つ科目としてとらえていることがわかった。

〔表10〕自分の今の生活に役立つと思う

| | いいえ | はい |
|----|-----|----|
| 合計 | 25 | 75 |
| 性別 | | |
| 男性 | 36 | 64 |
| 女性 | 19 | 81 |

②将来の生活に役立つと思うか

「将来の生活に役立つ」と答えた生徒は全体で140名（93%）おり、9割以上の生徒が将来の生活に役立つ科目として「家庭基礎」をとらえていることがわかった。そのうち男子は51名（91%）、女子は83名（94%）であった。系列ごとにみると、生活・人間系列、人文・社会系列では全員が、生物・環境系列（86%）工学・情報系列（84%）で、どの系列も8割以上の生徒が将来、役立つと認識しているといえる。

③被服実習のエプロン教材について

平成15年度の被服実習は、前年度に引き続き教材会社のエプロン製作キットを使用した。裁断・縫製する箇所がすでに印字されている布（淡い黄色の無地のもの）・糸・綿テープ・ボビン等がセットになっている。標準製作時間は6時間である。本校では、コンピュータマシンが一人1台完備されていることから、生徒のオリジナリティを出せるように、主にポケット部分にマシン刺繍を取り入れている。マシン刺繍では図柄の他、自分の名前を縫いつけることにしている。

マシン刺繍は生徒が楽しみにしているが、マシン刺繍が映える布地を選択するとなると布が限定されるため、

生徒の希望にそった色・素材・デザインのものを用意することは難しいと思われる。

今回のアンケート調査でも、「よかった」と答えたのはほぼ6割の生徒であった。男女差や系列による差異はとくにみられなかった。実習題材について、「自分で布を選びたかった」「型紙の作成など中学校でできなかつたことをしたかった」「エプロン以外のものがよい」などの意見もあり、今後再検討が必要であるといえる。

④調理実習の献立について

平成15年度は、年度中の授業変更等で年間指導計画通りに授業が進まず、結果として調理実習は2回行った。第1回目の献立は「三色どんぶり・すまし汁」、第2回目が「フレンチトースト・紅茶・うさぎりんご」であった。第1回目は、日本食を作るというテーマで、だしをとること、ご飯を炊くこと、肉・卵の加熱調理、野菜をゆでるといった、ごく基本的な技能を身につけることを目的としている。第2回目の実習は、保育の学習を受けて幼児食がテーマである。うさぎりんごは「切る」という包丁の技術の向上もねらって設定した。

アンケート調査では被服実習と同じく、ほぼ6割の生徒が「よかった」と答えるにとどまった。この原因としては、調理実習に対する学習期待が高いにもかかわらず、実習が2回しかできなかつたこと、また献立の設定が生徒の好みや期待に対応していなかつたことなどが考えられる。

⑤授業時間数について

2単位で行われている「家庭基礎」の授業について、「ちょうどよい」と回答した生徒は80%、ついで「少ない」が11%、「多い」が9%であった(表11)。系列で見ると「工学・情報系列」の生徒に「授業時間が多い」と回答した生徒が22%だった。学習項目が多いわりに、授業時間数が少なく、教える側としては物足りなさを感じずにはいられない。生徒にとっては約8割の生徒がちょうどよいと感じ、約1割の生徒が少ないと感じていることがわかった。

〔表11〕 授業時間数について

| | 少ない | ちょうどよい | 多い |
|----|-----|--------|----|
| 合計 | 11 | 80 | 9 |
| 性別 | | | |
| 男性 | 13 | 72 | 15 |
| 女性 | 11 | 82 | 7 |

⑥その他、要望や感想など自由記述

生徒の自由記述をいくつかあげると、以下のとおりである。

「家庭基礎はとてもためになった。料理とかはもっとやった方がよい。2回は少ない。将来一人暮らしをしても料理のことは役立つと思う(男子)」

「やっている授業のほとんどが将来に役立つことばかりでとても興味のある内容だったのでよかった。中でも一番思い出深いのはお腹の赤ちゃんが生まれるまでのビデオをみたこと。生まれる前から音楽を聴かせたり、話しかけたり、環境を整えたりすることに意味があると知ったときは感動した。ビデオ以外にもこの一年間で学んだことはこれから大人になるにつれて必要になることばかりだったと思う(女子)」

全体としてみると、調理実習の回数が少ないことを指摘するものが多かった。また講義を聞いて、自分の生活を見直そうと思った生徒や、2年次から始まる系列科目に対して思いを新たにした生徒もいた。

4. まとめと今後の課題

本研究では、本校の特色を生かした「家庭基礎」の学習内容を構築することを目的として、生徒が「家庭基礎」に何を求めているのか、生徒の家庭科の学習に対する期待を明らかにするためアンケート調査を行い、分析結果から学習内容を検討した。その結果、以下のことが明らかになった。

- 1) 「家庭基礎」の授業について、約8割の生徒が、楽しんで授業を受けたことがわかった。また、約7割の生徒が「家庭基礎」は「現在の生活に役立つ」と答えており、約9割の生徒が「将来の生活にも役立つ」ととらえていることがわかった。
- 2) 学習項目別にみると、「学んでよかった項目」としては「調理実習」が最も多く、ついで「保育」、「被服実習」「消費生活」「栄養と食品」の順であった。
- 3) 逆に「あまり必要ではないと思う学習項目」として「自分とは何か」「住居」「家族」「資源と環境」があがった。
- 4) 「もっと学びたい学習項目」は「調理実習」が最も多く、ついで「保育」「被服実習」「栄養と食品」「消費生活」の順であった。とくに男子の「調理実習」への学習期待度が高いことがわかった。
- 5) 「高校生に役立つ項目」は「調理実習」「自分とは何か」「消費生活」「栄養と食品」「被服実習」の

順に多くあがった。

- 6) 「将来に役立つ学習項目」としては、「調理実習」「消費生活」「保育」「高齢者」「栄養と食品」「住居」の順にあげられた。高齢社会を受けて「高齢者」に関する分野や、一人暮らしや自立を目指した「住居」に関する分野など、いまはあまり必要ではないが、将来的にみるとこれらの学習の必要性を感じていることがわかった。

- 7) 実習教材については、被服実習のエプロン製作、調理実習献立ともに、「よかった」と答えたのは約6割の生徒であり、「指定の布がよくない」「エプロンはこれで3回目」など生徒の満足度は低かった。今後、再考する必要があるといえる。

学習項目についてまとめると、「調理実習」に対して学習期待がもっとも高いことがわかった。いまの自分の生活に必要で、将来的にも役立つと答えた生徒が多かった。また「消費生活」はほとんどの項目の上位にあり、生徒の関心の高さをうかがえた。「高齢者」「住居」は、将来、役立つ学習項目としてとらえていた。「自分とは何か」「保育」「被服実習」「資源と環境」は系列によってとらえかたが違い、学習の必要性や期待度に差がみられた。

以上より、本校の生徒の実態から「家庭基礎」の学習内容を検討すると、「実習」に学習期待が高いことから、実習教材を柱として学習を進めることが効果的ではないかと思われる。生徒自身が必要性を感じ、また学びたいと考えている「調理実習」は、15年度は授業時間の関係で十分に行うことができず、生徒にとっては期待はずれに終わってしまった感がある。「食」は生きる源であり、他の学習項目に結び付けていくことも可能な学習項目である。生徒の学ぶ意欲を「家庭基礎」全体の授業につなげていくためにも「調理実習」の学習のあり方を検討したい。また本校の特色として、本来「家庭基礎」では扱われていない被服実習についても、生徒の期待が高いことから年間指導計画に取り入れ、講義部分とリンクさせて授業を行っていききたい。

そこで「家庭基礎」の年間指導計画の立案するにあたり、生徒の関心の高かった「消費生活」を年間の学習テーマに取り上げたい。私たちの暮らしは日々、消費行動の繰り返しである。家庭科の学習を通して、自分のライフスタイルを見直し、消費生活のあり方を考えさせることは必要であると考え。したがって、消費者としての意識の形成を核に、「ライフスタイルを決めるのは自分」というテーマで年間指導計画(表12)を立案した。

今後の課題として、以下の2つがあげられる。

第一に実習題材の精選である。実習を伴う授業に対して生徒の関心は高いが、他の学習項目とのバランスを考えると年間の実習実施回数には限りがある。生徒の期待を裏切らず、生徒の学習に有効な題材設定が必要である。生徒の生活実態を踏まえた上で、生徒のいまの生活および将来の生活にも役立つ学習内容にしていかなければならないといえる。

第二に、授業における実習の位置づけである。実習で行う実践と理論を結び付けていけるように授業の改善が必要であるを考える。これまで「家庭基礎」の授業形態は、理論を学習した後で実習を行うというスタイルをとってきた。その場合、実習は理論の総体性として位置づけられている。しかし、実習に対して学習意欲が高いことから、まず実習から入り、実習で得た体験をもとに、その後の理論の学習に結び付けていくことも可能ではないかと思われる。体験のなかから湧き出てきた疑問を、講義で学習しながら解決していくという授業の展開について、今後、検討していきたい。

引用文献および参考文献

- 1) 文部科学省(2000) 高等学校学習指導要領解説 家庭編, p. 4
- 2) 前掲書1) p. 5
- 3) 宮崎礼子編(2000) 家庭科の授業実践, 芽ばえ社
- 4) 石川實編(2002) 高校家庭科における家族・保育・福祉・経済―「家庭総合」・「家庭基礎」指導の基礎知識一, 家政教育社
- 5) 大学家庭科教育研究会(2004) 市民が育つ家庭科, ドメス出版
- 6) 鶴田敦子著(2004) 家庭科が狙われている―検定不合格の裏に, 朝日新聞社

〔表12〕

| 平成16年度 年間学習指導計画 | | | | | | |
|-----------------|------------------------|--|------|--|---------------------------|---|
| 教科 | 家庭 | 科目 | 家庭基礎 | | 単位数 2 | |
| 指導年次 | 必修・選択 | 1年 | 教材 | 家庭基礎 (出版社: 東京書籍) | | |
| 担当者 | 小清水貴子・良香織・宇津野花陽 | | 副教材 | 高校生のための生活学 (出版社: 大修館書店) | | |
| 学期 | 単元名または題目 | 指導内容 | | 指導上の留意点、資料等 | 予定時数 | |
| 1 学 期 | 1. 自分をみつめる | 1. ひとりしかいない自分 | | ◇「ライフスタイルを決めるのは自分」という視点をもって学習に取り組ませる。 ◇資料集の活用 | 2 | |
| | 2. 家庭の経済と消費 | 2. 自分らしく生きる 1. 経済生活を営む ①経済的価値観 ②収入と支出 ③税金と生活保障 2. 購入の意思決定 ①契約と解約 ②クレジット ③消費者金融と多重債務 3. 消費者として暮らす ①消費者問題 ②消費者保護基本法 ③グリーンコンシューマー | | | 8 | |
| | 3. 住生活の管理と健康 | 1. 住まいの機能と住環境 2. 住まいを決める 3. 住まいの衛生管理 ①ダニ・カビ ②バリアフリー | | | ◇間取り・平面表示記号 | 4 |
| | 4. 衣生活の管理と健康 | 1. なぜ着るかー私のファッションー ①被服気候 ②TPO ③購入方法 2. 被服(布)を選ぶ ①サイズ・形・色・柄 ②被服材料 | | | ◇エプロン作りを教材として衣生活について学ばせる。 | 4 |
| 2 学 期 | 5. 食生活の管理と健康 | 3. 被服構成と縫製 ①裁断(平面構成と立体構成) ②縫製(縫い方とその理由) 4. ラベルをつける ①組成表示 ②取り扱い絵表示 5. 手入れと保管 | | ◇被服実習 | 6 | |
| | | 1. 栄養と食事 ①炭水化物 ②脂質 ③たんぱく質 ④無機質 ⑤ビタミン 2. 高校生の食事 ①献立の組み合わせ ②栄養所要量 3. レシピを読み解く ①食材の購入(食品添加物) ②調理器具・手順 ③食材の取り扱い(食品衛生) 4. 自分の食事を用意する | | ◇洗剤の働き ◇生徒の生活実態に応じて、食生活改善をテーマに学習を進める。 | 4 2 8 | |
| 3 学 期 | 6. ともに生きる | 1. 家族の機能 2. 職業生活の設計 3. パートナーと生きる人生 4. 子どもを育てる人生 5. 地域福祉と参加する福祉 | | ◇資料集の活用 | 6 | |
| | 7. 保育と子どもの福祉 | 1. 子どもの育つ力 2. 子育てと親の役割 3. 子どもの育つ環境 | | | 6 | |
| | 8. 高齢者の生活と福祉 | 1. 高齢化を理解する 2. 高齢者を支えるしくみ 3. これからの高齢社会 | | | 4 | |
| | 9. 消費行動と環境 10. 生活設計 | 環境を守るライフスタイル 自分の人生を創造する | | | 2 | |
| | | | | | 18 | |
| | | | | | 22 | |
| | | | | | 18 | |
| | | | | | 18 | |
| | | | | | 58 | |